

## 性についての断想

—— 男色・姦通・自淫 ——

生殖のための性欲説は昔から強く主張されているが、交尾期をもたず、強い自意識をもっている人間には当てはまりそうにもない。にも拘らず、この説を世界で最初に固執したのはトマス・アキナスであった。聖トマスは十二世紀にその著、「自然に対する罪」の中で男色やマスターベーションは生殖をとまなわれないから、自然と調和する行為でないと、たくみな修辭法で述べている。

彼の誤りは、自然を内在的に観ず、人間から引き離して超絶的に観ている点にある。従って彼は自然の声を神の声とのみ感じたが、自然の律動に不感症であったことは当然である。ひるがえって、自然を内在的なものと観じ、そのリズムに感応しこれをロマンチックと考えるのは事大主義的实践主義者の寝言である。科学が意志として花咲く時期は目睫にせまってくるが、その時、この思想こそ科学であることが自明となるであろう。している人にとって

は、同性交合と異性交合の別なく、凡ての交合は性器を媒介として全身全霊を持つてする音楽的行為だと言つても過言ではない。故にその過程は種々なるテクニクを持つて演ぜられしかるべきである。丁度、器楽の演奏にピアノシモやメゾ、フォルテなどが必要であると同じである。従つて若いトルストイの化身が、コウカシアの原野の娘の奔放な情欲に驚嘆して、モスクワ仕込みのテクニクを恥づる場面も、要するに余りにも律動的なそのフォルテシモに啞然としたのみであつて、モウパッサンの性欲を巧緻にすることは、神をあざけつて美に捧げる唯一の讃歌だという意味の言葉を否定したことはない。彼はアナトール・フランスの言の如く、死ぬまでギリシヤ人だったのである。

アキナスは又、姦通は人殺しよりも悪いと云つて、あらゆる教条主義者やジャーナリストを近代でも飲ばせている。吾々は無惨な殺人の詳細極まる記事を夕刊で読む光榮に浴すが、チャタレー夫人の熱烈な性生活に関しては目をふさがれてしまつてゐる。アキナスの亜流は、マスターベーションに関する二十三章の教書すら発表している。かくして、中世の僧院内に於てマゾヒズムの起源となる自苦派を生む契機を作り、又、衆俗生活に於てざんげ聴聞僧は、昨夜女を後から犯したと告白した金持ちに、その財産の三分の一に価する免罪符を売らつたり、マスターベーションをやつたとさんげした若者をむち打つたりして、サディズムの起源を造り上げていた。

この傾向は近代まで糸を引いて、生理的にはなんの障害もない性欲処理方法であるマスタ

ーペーションを、病的な心理的恐怖に追い込んでいく。日本のインテリ諸君は、この点わりに理解のあるような顔をしているが、息子がいらいらしていると、積極的にマスターペーションを推めるポリネシア族の親ほど大胆になり得まい。

前述のような性欲に対する反動的心理から、中世以来近世まで続く処女崇拜という愚まいたな迷信が生まれてくる。処女と豊作と関連せしめたり、その乳はニンシンした尼僧を苦痛なく分べんせしめたり、夫の寢床で情夫と悦楽にふけたその妻の危険を救う妙薬となったりする。

これに反して、宗教が民衆の生活を毒さなかった時代には、性欲に対する迷信や羞恥は少しもなかった。それは日本においても、つくば山の歌垣の事実などに明らかであるが、アーサー王騎士物語の原本には、種々なる愉快な記録が残されている。中にも、アルスターの王妃は六百十人の宮廷の婦人達と共に、ある会合でその局部を誇示するためにスカートが高くまくりあげたという壮観は、イザナミ、イサナギの命をも啞然たらしめるものである。従って、当時はウイリアム征服王が自ら私生子であることを誇示したように、私生子を生むことなどは恥でもなんでもなかった。試験結婚は普通であり、市井の夫はその妻が騎士を情夫に持つことをむしろ誇りとした。婦人達はその夫に忠実にする義務など認めなかった。

当時、諸都市や村々にはヴァイオリンの原型である弓の楽器を持ち、角のある動物の頭や皮で作った祭儀的衣裳をつけ、性欲の讚美や穀物の豊作にちなんだバラッドを、歌ったりお

どったりして歩く沢山の異教の神々がいた。後にキリスト教徒がねつ造した悪魔の原型はこれだが、これらの異教の神々は至る処にいたが故に悪魔はへん在したのである。

中世初期には、この悪魔と対立する天使はまだ生霊ではなく、血も肉も添えていて、天国へ登るためには、丁度、近代の労働者が代議士などに成り下るために労働組合という縄ばしごに足を掛けるように、矢張り天までとどくはしごを必要とした。処が十六世紀にシエクスピアが初めて生霊をでっち上げるに至って、天使は羽根を持って、心をとらえる女のくちびるより、より高く飛しようすることが出来るようになった。

これには一寸悪魔も困ったようである。というのは当時「キリスト教からの有望な改宗者に晩めしをおごった」悪魔の記録が散在するからである。十八世紀にすら、スコットランドの詩人ロバート・パンズは、この悪魔が街でヴァイオリンをかなでたり、おどったりして収税吏を追い払った面白い詩を書いている。この悪魔は明らかにアナキストであったと書いている人もある。

すでに紙数もなくなつたので近親相姦について一筆するが、これについて知りたい人は、「アナキストであるだけでは充分でない、アソシアルでなければならぬ」と書いたアン・リネル著「赤いスフィンクス」を読むことである。